

子どもと親とのこころの距離感

子どもが何か悩んでいた、問題にぶち当たったりしたとき、親はどこまで手や口を出していいのか、悪いのか…。結構悩まれている方は多いのではないのでしょうか？口出しし過ぎるのも本人のためにならなそうだし、何も放っておくのもどうかと思うし、“ちょうど良い加減”って難しいですね。

この、親が子どもの成長を支えていくための方法、子どもと親との「こころの距離感」は、子どもの発達段階（年齢）によって多少変わってくるとは思いますが、基本はどの段階でも同じだと思うので、親としては多少意識しておけると、いざというときの心構えとして役立ちます。

まずは、「子どもは自分（親）とは違う一人の人間」だということ。たとえばこんなケース。あるお母さんが、「息子の様子を見てると可哀そうで見たいられません。本人もきっと困っているはずなので、カウンセリングをお願いしたい。」と相談されました。「では、今日、お子さんに“困っているならお話をしてみたら？”と話してみてください。」と伝えたところ、後日、「子どもに聞いたら“僕、何も困っていないよ”と言われてしまいました。困っていたのは私だけだったようです。」とのことでした。『自分（親）から見て〇〇なのだから、子どももきっと〇〇（のはず）だ』という思考は、子どもを理解することには決してつながらないということ、覚えておいてほしいと思います。

そして、「つかず離れず、見て守る」こと。これがなかなか難しいんですね。子どもの側の心理としては、「放っておいて欲しいけれど、ちゃんと見ていて欲しい」ことが多いように思います。だとすると、親の側も「放っておくよ。でもちゃんと見ているよ」という姿勢が大切になるわけです。口や手を出すのは、子どもからのSOSを受けてから、ということになります。その間、子どものしていることを見ていると、危なっかしかったり、親の経験上、「それは失敗するぞあ〜」と予測できてしまうような決断をしたり、「自分がやって（言っ）てやった方が早いなあ」と思うことも多々あると思います。でもそこはグッと我慢。よっぽど止めなければいけないような行動でない限りは、子どもの意思を尊重しましょう。結果や、その結果を子どもがどう受けとめるかは、“子ども次第”なんです。

日ごろから、子どもの気持ちを引き出せるようなコミュニケーションを、親としてこころがけておきたいものですね。